

# 弥生時代青銅器生産における 土製鑄型の採用過程

The Adoption Process of Clay Molds in the Production of  
Bronze Artifacts in the Yayoi Period

菊池 望

KIKUCHI Nozomu

はじめに

① 弥生時代青銅器研究史における土製鑄型の認識

② 土製鑄型の系譜

③ 土製鑄型外枠の基礎的分析

④ 土製鑄型外枠の採用過程とその意義

おわりに

## 【論文要旨】

近畿地方を中心とした地域では、弥生時代中期後葉ごろから、石製鑄型に代わり土製鑄型を用いた青銅器生産が開始された。土製鑄型の採用は、青銅器製作の工程を簡略化するとともに、青銅器製作技術の向上にもつながった。また、銅鐸生産に土製鑄型が採用される弥生時代中期末ごろには数多くの銅鐸群が併存するようになり、弥生時代後期になると銅鏃などの小形青銅器が土製鑄型外枠を用いて数多く作られるようになる。このように、多くの変化をもたらした土製鑄型の採用過程の解明は、青銅器生産体制の動態をも明らかにする重要な研究課題といえる。

本研究では、近畿地方における2種類の土製鑄型である粘土型と土製鑄型外枠の基礎的分析を通じて、土製鑄型の採用過程について検討した。その結果、①近畿地方の青銅器生産における土製鑄型の採用は、外的影響に依らない近畿地方内での段階的試行によるものであること、②土製鑄型外枠のほとんどは小形青銅器の製作に用いられたこと、③現在知られている土製鑄型外枠による青銅器製作技術は広域に普及し、技術自体の規範の弱さと製作拠点間の没交渉性を背景に地域性が発現したこと、④土製鑄型外枠を用いた青銅器製作技術は、弥生時代後期に新たに生じる小形青銅器の生産体制の技術的基盤となったことを明らかにした。

【キーワード】 弥生時代、近畿地方、青銅器生産、土製鑄型、土製鑄型外枠